

表 D6-3-7 現代美術館正味財産増減計算書

(単位：千円)

	平成24年度	平成25年度	平成26年度
自主事業			
入場料	90,242	140,099	143,375
協賛金	15,879	4,300	4,472
受取東京都負担金	48,821	42,211	45,000
その他	44,633	3,304	5,065
経常収益計	199,577	189,916	197,913
経常費用	223,624	279,081	360,398
(差引)損益	△24,046	△89,166	△162,484

	平成24年度	平成25年度	平成26年度
受託事業			
入場料	35,225	35,882	36,299
施設使用料	32,706	33,132	34,257
管理運営受託収益	796,983	845,879	868,621
その他	8,205	7,671	7,302
経常収益計	873,121	922,567	946,480
経常費用	872,223	901,091	934,306
(差引)損益	897	21,476	12,173

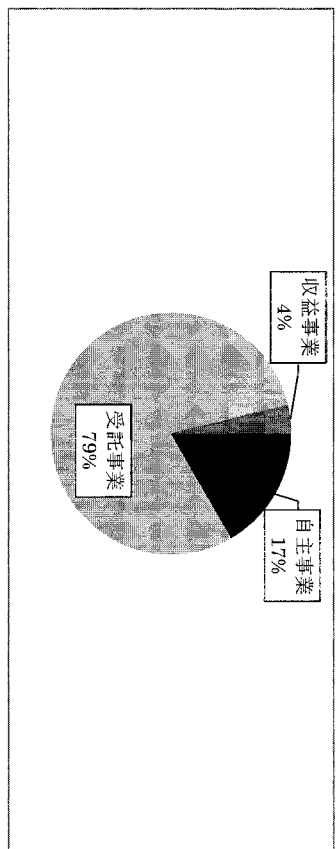
	平成24年度	平成25年度	平成26年度
収益事業			
施設使用料	3,294	3,417	9,339
管理手数料	17,479	19,664	16,410
駐車場使用料	15,216	6,297	7,482
その他	29,340	13,190	11,591
経常収益計	65,331	42,570	44,823
経常費用	19,135	20,187	17,247
(差引)損益	△6,195	22,383	27,575

(注) 歴史文化財団の決算書を作成しているため、文化振興部所管の建物減価償却費などのコストを含んでいない。
(歴史文化財団作成資料より監査人が作成)

企画展(自主事業)に力を入れているが、コスト負担が多く、例年赤字が続いている。

次に、平成26年度の事業別収益割合はグラフ D6-3-6 のとおりである。

グラフ D6-3-6 現代美術館における各事業収益割合 (平成26年度)



(注) 経常収益を基準に算定している。
(歴史文化財団作成資料より監査人が作成)

表 D6-3-7 及びグラフ D6-3-6 (歴史文化財団の決算書ベース) から次のことが読み取れる。まず、平成26年度の収益割合では、受託事業が8割と高く、自主事業が2割弱、収益事業が若干の割合である。受託事業は文化振興部からの指定管理料収入など受託収益があるためか黒字が毎年継続している点は他の文化施設と同様である。他の文化施設と異なる現代美術館の特徴は、自主事業の赤字が毎年大きく、これを受託事業や収益事業の黒字で賄えず、施設全体で赤字が生じている点にある。

なお、歴史文化財団の決算書には文化振興部からの指定管理料収入が含まれるため、この指定管理料を除けば、受託事業は、表 D6-3-8 のとおり、実質的には赤字であることは他の文化施設と同様である。

表 D6-3-8 受託事業の実質的な損益状況

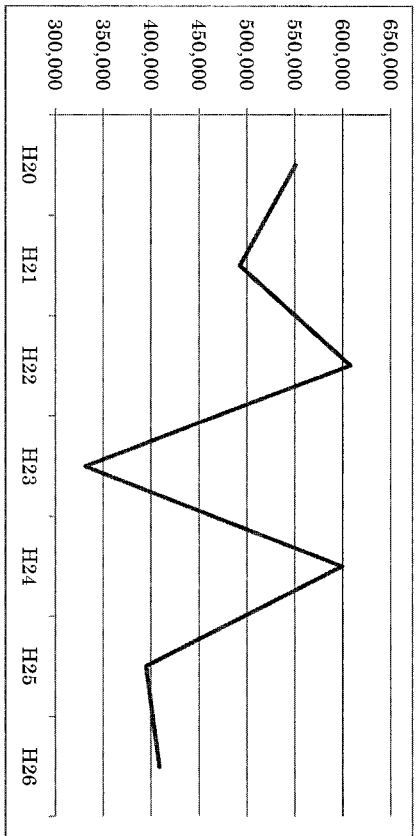
(単位：千円)

	平成24年度	平成25年度	平成26年度
受託事業			
経常収益計	873,121	922,567	946,480
経常費用計	872,223	901,091	934,306
決算書の損益	897	21,476	12,173
指定管理料収入※	796,983	845,879	868,621
(差引)実質損益	△796,086	△824,403	△856,448

※ 施設の大規模改修関連費用分等を含んだ数値である。
(歴史文化財団作成資料より監査人が作成)

次に、現代美術館における来館者数の推移についてはグラフ D6-3-7 のとおりである。

グラフ D6-3-7 現代美術館における来館者数の推移



(生活文化局作成資料より監査人が作成)

グラフ D6-3-7 のとおり、年度ごとの来館者数の変動が激しいことが分かる。平成 23 年度は企画展「フレデリック・バツク展」(7/2～10/3) が、平成 25 年度は企画展「手塚治虫×石ノ森章太郎 マンガのちから」(6/29～9/8) と夏期の企画展が不振であったことが影響し、来館者数が落ち込んでいる。他の文化施設と比べて、自主・受託・収益事業を合算した全体で見ても赤字が毎年続いでおり、企画展の成否も年度によって波があることが分かる。

参考に、現代美術館と横浜美術館の比較をする(表 D6-3-9 参照)。

表 D6-3-9 現代美術館と横浜美術館比較

項目	現代美術館	横浜美術館
設置者	東京都	横浜市
運営形態	指定管理者	指定管理者
運営者	歴史文化財団グループ	公益財団法人横浜市芸術文化振興財団
敷地 (㎡)	23,780	19,800
延床面積 (㎡)	33,515	26,829
年間来館者数 (人)	394,885	976,820

(生活文化局作成資料より監査人が作成)

(注) 年間来館者数については、平成 25 年度における実績値を用いている。

表 D6-3-9 のとおり、現代美術館は、横浜美術館と比べて、施設規模は大きい
が、年間来館者数は大きく下回っている。この点、文化振興部に質問したところ、
「横浜美術館は運営形態、展示物の特徴について現代美術館と類似点がある
が、立地（横浜美術館はみなとみらい、現代美術館は本場公園）や設置主体、
設置主体における文化施設保有数、設置目的、展覧会等の事業構造、指定管理
料、指定期間における目標、近隣の文化施設状況等が相違しているため、入館
者数等についても比較すべき対象とは考えていない」という回答を得た。ここ
で、「比較すべき対象とは考えていない」ということであるが、比較検討した上
で、学ぶべき点は参考として取り入れるべきである。

(5) 東京都美術館の損益等の状況について

都美術館は、都民のための美術の振興を図る施設として設置されている。設置場所は、上野公園内に位置する。他の都立美術館と異なり、公募団体等による公募展のため、その団体と連携を図りつつ、施設を貸出しすることが事業収益の柱となっている。また、平成27年度の「モネ展」などのように、特別展・企画展も開催している。

都美術館で実施される主な事業は以下の3つである。

- ・自主事業…特別展・企画展等の開催 (表 D6-3-10 参照)
- ・受託事業…公募展展示室等の貸出し (指定管理者としての事業)
- ・収益事業…ショップ・レストランの運営、出版物販売等

表 D6-3-10 平成 26 年度特別展実績

(単位：人)

展覧会名	実績 (観覧者数)	1 日当たり観覧者数
「日本美術院再興 100 年特別展 世紀の日本画」	167,955	2,999
「バルデユス展」	204,014	3,579
「メトロポリタン美術館 古代エジプト展 女王と女神」	195,594	3,372
「ウツイン美術館展 黄金のルネサンス ボッティチェリからブロンズイーンまで」	210,671	3,632
「新印象派 光と色のドラマ」	148,293	2,648

(歴史文化財団作成資料より監査人が作成)

ここで留意すべきは、都美術館は、ホール系文化施設と同様、都の条例に基づき、貸出施設ごとに利用料金を設定し、公募団体等に展示施設を貸出ししていることである。また、展示施設を自らが主催・共催する特別展については、展示使用料は協定書により共催者が負担しているが、企画展に利用した場合、歴史文化財団の自主事業は受託事業に対して、貸料見合いの一定の内部費用を支払う会計処理をしている (法人全体ではこの内部取引は消去している)。

さて、これら主要 3 事業の、平成 24 年度から平成 26 年度の損益状況は、表 D6-3-11 のとおりである。

表 D6-3-11 都美術館正味財産増減計算書

(単位：千円)

自主事業	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
入場料	15,020	12,301	9,381
共催事業収益	68,020	45,068	33,577
受取東京都負担金	-	14,997	22,428
その他	-	302	13
経常収益計	83,041	72,669	65,399
経常費用計	165,094	100,459	127,756
(差引) 損益	△82,052	△27,790	△62,356

受託事業	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
施設使用料	292,796	297,807	299,829
管理運営受託収益	549,728	496,485	560,929
退職給付繰入額	3,522	4,006	4,372
その他	1,208	746	408
経常収益計	847,255	799,044	865,539
経常費用計	844,494	750,935	804,581
(差引) 損益	2,761	48,109	60,958

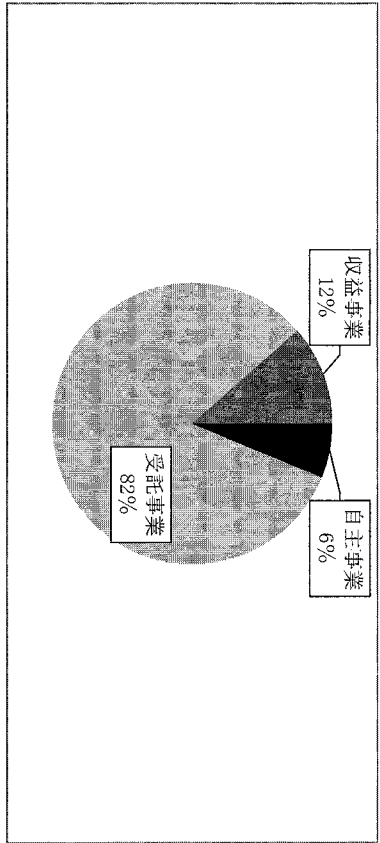
収益事業	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
共催事業収益	32,571	18,228	19,550
管理手数料	95,703	80,311	77,993
受取光熱水費	18,014	16,801	17,038
その他	9,255	8,264	6,413
経常収益計	155,545	123,606	120,995
経常費用計	34,531	30,895	31,935
(差引) 損益	121,013	92,711	89,060

(注) 歴史文化財団の決算書を基に作成しているため、文化振興部所管の建物減価償却費などのコストを含んでいない。

都美術館では、自主事業の赤字を受託事業と収益事業の黒字で賄っている。

次に、平成26年度の事業別収益割合はグラフD6-3-8のとおりである。

グラフD6-3-8 都美術館における各事業収益割合（平成26年度）



(注) 経常収益を基に算定している。
(歴史文化財団作成資料より監査人が作成)

表D6-3-11及びグラフD6-3-8（歴史文化財団の決算書ベース）から次のことが読み取れる。まず、受託事業の収益割合が約8割と高く、自主事業が1割弱、収益事業が1割強である。次に、受託事業は文化振興部からの指定管理料収入など受託収益があるためか黒字が毎年継続しており、江戸博の次に黒字が大きい。一方、自主事業は民間では実施しづらい公益的な事業などを実施しているとはいえ採算が悪く、赤字が毎年継続しているが、その赤字幅は、写真美術館を除き、他の展示系文化施設と比べ小さい。収益事業の黒字が毎年継続しており、施設運営に寄与している。これらを総合的に見た場合、他の展示系文化施設と異なり、受託事業で施設の貸出しによる安定的な収入を確保することができるが、企画展は自らが企画・運営のリスクを負っており、作品借用等に係るコストも多く負担している。したがって、美術館運営の採算改善のためには、自主事業の黒字化、受託事業の更なる黒字化が望ましい点では他の文化施設と同様である。

なお、他の文化施設と同様、歴史文化財団の決算書には文化振興部からの指定管理料収入が含まれるため、これを除けば、受託事業は、表D6-3-12のとおり、実質的には赤字である。

表D6-3-12 受託事業の実質的な損益状況

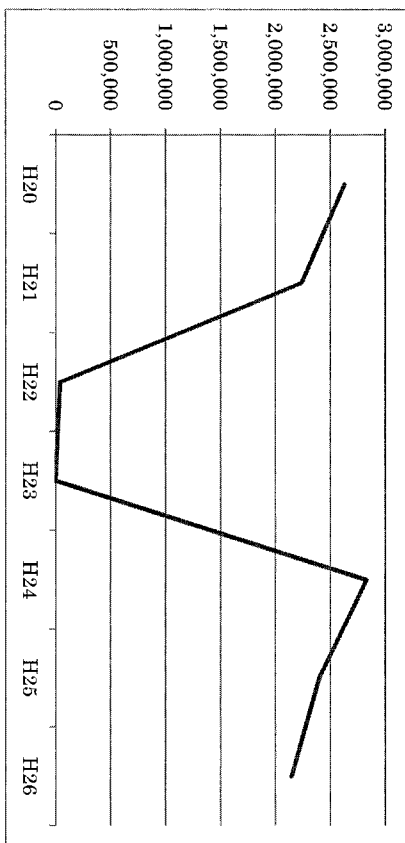
受託事業	平成24年度			平成25年度			平成26年度		
	経常収益計	経常費用計	決算書の損益	経常収益計	経常費用計	決算書の損益	経常収益計	経常費用計	決算書の損益
経常収益計	847,255	844,494	2,761	799,044	750,935	48,109	496,485	560,929	560,929
経常費用計	844,494	844,494	2,761	750,935	750,935	0	496,485	560,929	560,929
決算書の損益	2,761	2,761	2,761	48,109	48,109	48,109	0	0	0
指定管理料収入※	549,728	549,728	549,728	496,485	496,485	496,485	496,485	496,485	496,485
(差引) 実質損益	△546,967	△546,967	△546,967	△448,376	△448,376	△448,376	△448,376	△448,376	△499,971

※ 施設の大規模改修関連費用分等を含んだ数値である。

(歴史文化財団作成資料より監査人が作成)

なお、入館者の推移については、グラフD6-3-9のとおりである。

グラフD6-3-9 都美術館における来館者数推移



(歴史文化財団作成資料より監査人が作成)

平成22年度から平成23年度においては、大規模改修のため休館している。その後、リニューアルオープンした平成24年度は来館者数が増加したものの、平成25年度から来館者が徐々に減少しているように見受けられる。

なお、都美術館と国立新美術館を比較した場合、表D6-3-13のとおりである。いずれの美術館も、主として、美術品等をほぼ収蔵することなく、外部から有名作品等を賃借して特別展等を開催している。